

# おにぎり石の伝説

戸森 しるこ 文  
西村 ツチカ 絵

① 始まりは、こんな一言だった。

「この石、なんだかおにぎりみたい。」

② だれが最初にそう言ったのかはわすれてしまったけれど、その一言がきっかけで、空前のおにぎり石ブームは始まった。

③ それは、すべすべした手ざわりの、小さな三角形の石で、確かに 5 にぼくの目にも、指先サイズの小さなおにぎりのように見えた。黒い油性マジックで、のりをかき足してみたくなる。

④ おにぎり石の出現は、ある日とつぜんだった。学校のうら庭に、じやりがしかれて

だ。簡単に見つかるわけではなくて、集中してさがして、せいぜい一日一個とか、とてもラッキーな感じのする、いいぐあいの確りつだった。

⑤ 初めは、ぼくのクラス、五年二組の女子の間で、おにぎり石が人気になった。四つ葉のクローバーを見つけるような感覚だ。それでぼくたちも、そのうち何となくつられ始めた。

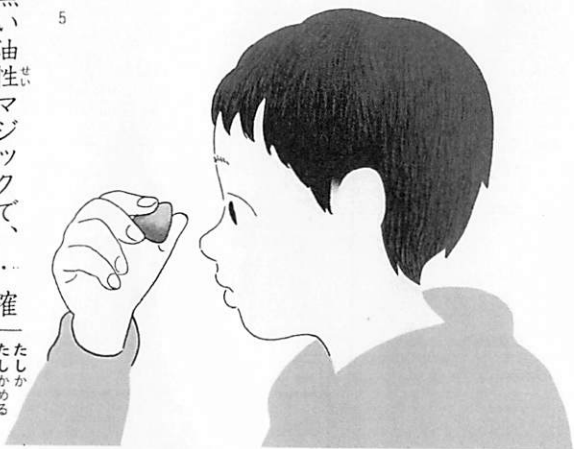
「すべすべしていて、ふつうの石とはちがう気がする。」

「こんな石が自然にできるなんて、不思議だよね。」

「見つけた人は、幸せになれるらしいよ。」

⑥ すると、おにぎり石にまつわる、みょうなうわさ話が聞こえてくるようになった。その昔、あるたんけん家が、なぞの「おにぎり島」から持ち帰った石なのだとか、この学校ができる前、ここには「おにぎりランド」とよばれるテーマパークがあったのだとか、きょうふの「おにぎり大魔王」のろいの石なのだとか……。数々の「おにぎり石伝説」に、ぼくらはうっかりむねをおどらせた。

⑦ 休み時間になると、みんなでおにぎり石さがした。放課後には、クラス内で複数の



確 たしかめられる  
カク

現 ゲン  
あらわされる

個 コ

四 よ

複 フ



たまま、一成の顔を見ていた。

「でも、じゃあ、学校のおにぎり石は……？」

「知らないけど、例えばカラスかなんかが、ここから持っていくんじゃないか？  
いたずらか、ちよつとした思いつきでさ。どっちにしても、深い意味なんかないよ。」

⑮ ぼくの頭の中で、まぬけな声のカラスが鳴いた。

⑯ あまりのしよげきで、しばらくの間立ちつくしていると、そんなぼくの顔をのぞきこみ、一成は心配そうに言った。

「言わないほうがよかった？ 二組の夢がこわれたかなあ。」

⑰ ぼくはあわてて首を横にふった。確かに夢から覚めた気分だったけど、そのおかげで、ぼくはあることを思いついたのだった。

「ちよつとお願ひがあるんだけど。」

⑱ 次の日の放課後、五年二組のみんなは、おにぎり石さがしを中だんし、一成の家に集まった。おにぎり石だらけの庭を見ると、みんな、あっけに

とられてとまどいながら、それでもやっぱりよろこんでいた。

「おにぎり石パラダイスだ！」

「最高すぎる！」

「一つもらってもいい？」

「じゃあぼくは二つ。」

「ぼくは三つ！」

⑲ だけどぼくは、タイミングを見計らって、わざと水を差すようなことを言った。

「でもさ、こんなにくさんあると思うと、なんだかかちが下がるような気がしないか？」

⑳ ちよつとどきどきした。空気を読めないやつだって、言われてしまうかもしれない。だから、そう言われる前に、ぼくは一成に目くばせした。一成はうなずいて、

「おいおい、勝手にやってきて、失礼なやつだなあ。」

と、計画どおりに、おどけてせりふを言った。

「確かに、こんな石のどこがいいんだらうって、ぼくは思っちゃうけどね。」



夢  
ムゆめ

めさないだろう。それに、ほかのクラスのやつがおにぎり石を見たときに、いったいどういう反のうをするか、ちよつと気になった。この石は本当に、そんなにかちのある物なのだろうか。それで、ぼくはおにぎり石をポケットから出して、一成に見せることにした。

「実は、みんなでこれをさがしているんだ。貴重なんだぞ。伝説のおにぎり石だ。」

21 石にまつわる伝説を三つほど語り終えたところで、一成がとつぜん、「ぶつ」とぶき出したから、ぼくはむっとした。

「何で笑うんだよ？」

「ごめん。とりあえず、明日の放課後、うちに来てもらってもいいかな。話はそれからだ。」

22 意味が分からない。

23 次の日、ぼくは初めて一成の家に行った。

「屋根が三角だ……。」

24 まるでおにぎり石のような、三角屋しき。そういえば、一成の名字は「三角」じゃないか。だから何だと言われてもこまるけど。

「いらっしやい。庭へどうぞ。」

25 一成はそう言つて、ぼくを庭に案内してくれた。

26 その光景を見たとき、ぼくがどう思ったか、言葉ではとても表現できそうにない。

「うわあ、何だこれ！」

27 ぼくがそこで目にしたものは、何千、何万の、おにぎり石の大群だった。おにぎり、おにぎり、おにぎり石だらけ。庭におにぎり石がしきつめられている。

「すげえ！ 一成、さてはおまえがおにぎり大魔王だったんだな？」

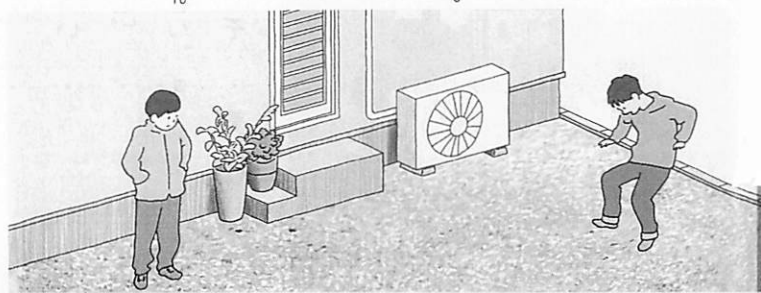
28 一成はかたをすくめて言った。

「これは人工的に作られた石だよ。自然にできた物ではないし、もちろん、大魔王ののろいのわけもないし。」

29 ぼくは絶句だ。まるで時間が止まってしまったみたいに、ぱかっと口を開け

10

5



10

5

名 ミヨウ  
絶 たえす  
句 たつ

③0 一成の冷静な一言を聞いて、みんなはそれぞれ顔を見合わせた。

③1 すると、様子をうかがうような、いっしゅんの間の後で、だれかが言ったんだ。

「真の気持ち、分かるよ。めったに見つけられないってところが、よかったんだよな。」

③2 そうしたら不思議なことに、みんなも口々に同じことを言い始めた。いっせいに色が変わるみたいに、気持ちが伝染していった。すごいいきおいだった。最終的に、

「ああ、がっかりだよ。」

なんて言い合って、かたを落としながら、みんながえがおになったんだ。おにぎり石の庭で、ぼくたちはそろってくすくす笑っていた。こんなって久しぶりだった。

「一つずつなら、持って帰ってもいいよ。」

③3 一成は言ったけど、おどろいたことに、持ち帰ろうとするやつは、もう一人もいなかった。むしろ、今までに見つけたおにぎり石を、一成の庭に「返さやく」するやつが出てきた。

③4 おにぎり石のせいで、クラス内でびみょうな上下関係ができて始めていることに、きつとみんなも気がついていたんだと思う。このゲームを終わらせるには、何か強力なパ

ワーかアイテムが必要だったんだ。

③5 新たな気持ちになって見てみると、おにぎり石は、やっぱりとてもきれいで、すごくユニークな石だった。

③6 みんなが帰った後、ぼくは一成にお礼を言った。

「ありがとう。確かにぼくたち、何かにとりつかれていたのかもしれない。」

③7 これで、ぼくたちのおにぎり石伝説は終了、一件落着いてわけだ。

③8 えがおで片手をあげた一成の手をパンとたたいて、ぼくはそう思った。

久  
ひさし  
キユウ

